



市内事業所の
個性豊かな社長さんや
店長さんなどの意外な交友関係をご紹介します。
いつかあなたにも繋がるかも？

いいともバトン：No.22 登場の外山栄治さん ➡ 江部登茂子さん



左／江部登茂子さん 右／有本陽平さん

いいとも No.23

「美容室TOMOKO」(栄町)オーナー 江部登茂子さんの“とものわ”は、「有本コンクリート工業(株)」(大郷町)社長 有本陽平さん。2人は加茂小学校、加茂中学校の同年生。小、中学校時代は同じクラスになることがなく、あまり接点がなかったのですが、卒業後に加茂中学校の同年会の幹事役を一緒に務めることになり、交流するようになりました。また、江部さんのご主人と有本さんの奥様が親戚関係にあるなどのご縁もあるそうで、「またこの“とものわ”で繋がったのも何かの縁ですね」と笑顔で話してくださいました。

私事で恐縮ですが、よもやま話としてお付き合い下さい。初代山内善左工門は、江戸後期に鶴森より仲町の現在地に移り住みました。大正時代信越本線が開通するまでインフラの大動脈は信濃川に通じる加茂川で、兩岸には船頭さんの家が建ち並び活況を呈していたそうです。明治三年、満載の荷物が入った翌日、三

軒上隣より出火、通称「外山火事」で焼け出されました。土地は田上の田巻様に買ってもらい、戦後に買い戻しました。曾祖父の代まで納める菓子共々雪そりに乗り、紋付羽織袴で正月の御挨拶に伺ったそうです。写真は明治四年築の建物です。間口六間半奥行三十間の町屋作りでした。店を抜けると左東側は明り取りの為吹き抜けの土間通路が続き、西側は仏間、茶の間、坪庭、仕事場と続

き土間通路と仕事場の間は板の間で、飯台を出すと食堂、仕舞って作業場になりました。その先は少し広い土間の台所と作業場で山の水の内井戸もあり、西側の庭の雪消し池と鯉の泳ぐ池に昭和三十九年の新潟地震で水路が断たれるまで枯れる事なく加茂山の恵みを享受していました。その奥は風呂場、手洗い所、通路の突き当りに前の土蔵、細い東側通路の先に奥の土蔵があり、昼間は高窓より光が差し込みますが夜は真暗闇の世界でした。つらから絶え間なく落ちる「雪とけ」の音に春を感じ、夏は内井戸にスイカを冷やし、秋は茶の間にすすきと十五夜団子を飾り、吹き抜けの障子戸の縄をゆるめ開け放ち



うのもりや
明治4年～昭和44年の
建物

登月をめ、冬は雪が吹き込む中での食事、二階の手搾に干したももひきがバリバリのスルメイカになった日もあったり、今では考えられない様ですが思い出の詰まった家でした。
話は戻りますが、火元の外山家は北海道へ渡りその後成功し青海神社に石垣を寄進されました。大石段を登り切った両側に苔むして見えにくくなっています。函館港外山〇〇」と刻んであります。是非御一見下さい。お読みいただきありがとうございます。うございしました。



ふるさと
よもぎま
「私の加茂」
その2

(株)鶴の森屋
社長 山内 美恵子